今月の特出し

令和4年4月採用　町職員募集！

職種・採用予定者数

一般行政職初級（障害者）【1名】

試験日

10月31日（日）

試験会場

多古町役場

受験資格

一般行政職初級（障害者）

●昭和61年4月2日から平成16年4月1日までに生まれた方で、学歴は問いません。

●身体障害者手帳、療養手帳または精神障害者保健福祉手帳の交付を受けている方。

申込書の配布

役場2階の総務課で配布中〔午前8時30分～午後5時15分〕

※土・日・祝日は、日直にお申し出ください。

●町ホームページからもダウンロードできます。

●郵送により申込書を請求する場合は、返信用封筒を同封してください。

（角形2号封筒に住所・氏名を記入し、120円切手を貼ったもの）

申込書の受付

8月17日（火）～31日（火）

役場2階の総務課で受付（土・日・祝日を除く）〔午前8時30分～午後5時15分〕

※郵送の場合は、8月31日（火）の消印まで有効です。

申込・お問合せ●総務課庶務係　☎76-2611（〒289-2292 多古町多古584番地）

多古こども園職員募集！

多古こども園では、次の職種の会計年度任用職員を募集します。

職種●①看護師　②保育教諭　③保育補助員

仕事内容●①・園児の体調不良やけが、傷などの応急処置など

・月1回ほけんだよりの発行などの他、簡単なPC操作あり

②・③0～5歳児の保育・教育業務（③は保育教諭の補助）

資格●①看護師または准看護師　②幼稚園教諭および保育士

給与（月額）●①看護師　200,700円、准看護師176,700円　②165,900円

③150,600円※それぞれ通勤手当支給

勤務時間●基本は月曜～金曜日の午前8時30分～午後5時15分（勤務開始日も含め応相談）

その他●社会保険、雇用保険の適用あり

詳しくは、お問い合わせください。

申込・お問合せ●多古こども園　☎76-6050

“ずっと”多古で暮らす　第3回

高齢になっても、介護が必要になっても、住み慣れた多古町でいつまでも暮らしたい。

第3回は、「最期の瞬間まで自宅で過ごす」です。がんで余命宣告をされた女性が、訪問診療、訪問看護の支援を受け、住み慣れたわが家で亡くなりました。

最期まで自分らしく暮らしたい。本人からの願いを受けて、ご家族も奮闘した自宅での看取りについてご紹介します。

享年72歳でお亡くなりになった原啓子さん

自分の命の終焉を宣告される

原啓子さんと出会ったのは、病院の相談室からの一本の電話でした。「一人暮らしの女性が、がんの終末期の宣告を受け、これから自宅で療養生活を送りたいと希望しているが、サポートしてもらえるだろうか」との相談からでした。

まずはご本人に会うために病院を訪ねました。ご本人は、数日前に余命宣告を受けたばかり。肺にも転移をしていて酸素吸入をしていました。とても明るい方で、病気の深刻さは感じられず、自宅に戻るにあたり、訪問診療と訪問看護の支援を受けること、また介護保険を申請し、ベッドなどの療養環境の整備の相談がありました。併せて、一人での在宅療養は困難なため、本人が一番信頼している姉夫婦がサポートしてくれることになりました。

姉が妹を介護する

退院した当初、酸素を吸って、息苦しさはあるもののベッドの上にいる原さんはとても元気でした。お姉さんはご主人と一緒に病状説明を聞き、とてもびっくりしたとのことでしたが、妹が最期まで自宅で過ごせるように、泊まり込みで介護することを決めました。

退院した最初の一週間、久しぶりに過ごす姉妹二人の時間では、今までのことを振り返り、穏やかな時間を過ごしました。原さんは、とても前向きな方で、今までの仕事のことや趣味のことなど、お姉さんを交えながらいろいろな話をしてくれました。

瞳をくるくると動かしながら生き生きと話をされる姿を見て、お姉さんが小さい頃からのあだ名を教えてくれました。その姿から小動物の「リス」のようだと、家族みんなで「リス」と呼んでいたそうです。お姉さんの話の端々から、仲の良い姉妹の様子が伺えました。

この時、お姉さんからは妹がもうすぐ亡くなるなんて嘘のようだ、ずっとこんな穏やかな時間が続くのではないかと思ってしまうと、つらい胸の内を明かしてくれました。

訪問看護のケア

退院してからは、毎日自宅に看護師が訪問していました。気持ちは元気な原さんとは裏腹に、がんは確実に体をむしばみ、酸素を吸っていても息苦しく、食事量も少なくなってきました。

（訪問看護師は、自宅に訪問し、その方の病気に応じた看護を行います。主治医の指示を受け、病院と同じような医療処置も行い、自宅療養に最期まで寄り添っていきます。）

退院して2週間目に入ったあたりから、ご本人の状態はどんどん悪化し、体を起こすだけで息苦しさが増し、ベッドの上から動くことができなくなりました。痛みも強くなっていき、痛み止めを飲むことも多くなり、声をかけても応答することができないことも増えていきました。

不安に思う家族に訪問看護師は、本人の状態を説明し寄り添いました。また、本人の状態に合わせ、医療器具が置かれていきました。

自分らしく生きる

退院から3週間がたった夜中に、原さんは自宅で静かに息を引き取りました。最期は苦しむことなく、眠るように。

病気の宣告からあっという間の出来事でしたが、「つらい時間もあったけど、本人の希望通り自宅で過ごせて良かったと思っているし、姉妹としてそばにいることができて良かった」とお姉さんは話されました。

お姉さんのサポートを受け、自宅で最期のときを迎えることができた原さんは、きっと空の向こうで笑顔でいるに違いありません。

自宅での看取り。訪問診療、訪問看護という医療職とともに本人、家族に最期のときまで寄り添い支援していく。最期まで自分らしく生きることを、多古町ではこれからも支えていきます。